


日本財団補助金による
1999年度日中医学協力事業報告書

—学会開催に対する助成—

1999年8月18日

財団法人 日中医学協会
理事長 中島章殿

報告者氏名 北川 正信 
所属・役職 富山医科薬科大学・名誉教授
所在地 〒930-0194 富山市杉谷 2630
電話 076-434-2281 内線 2343

講演集・シンポジウム写真等学会に関する資料を添付

学会・学術交流の名称 第1回中日共同石綿シンポジウム
テーマ 日中西国における石綿の健康障害
主催団体 中国予防医学科学院労働衛生職業病研究所 / 日本石綿研究会
代表者 李 徳鴻 北川 正信
期間・開催地 1999年7月16・17日 中国北京市
参加者数 日本側 18名 中国側 32名
~~招へり~~ 派遣目的 石綿の健康障害に関する研究発表, 座長を含む
専門家の交流

1. ~~招へり~~ 派遣研究者 人数 15 人 記入欄不足の場合は別紙を添付。

氏名	所属・役職	研究分野
1. 平岡 武典	国立療養所宮崎病院、副院長	呼吸器内科学
2. 井内 康輝	広島大学医学部、教授	人体病理学
3. 井上 康	兵庫医科大学、医員	呼吸器内科学
4. 石原 陽子	東京女子医科大学、講師	公衆衛生学
5. 君塚 五郎	千葉大学看護学部、教授	実験病理学
6. 岸本 卓巳	岡山労災病院、部長	呼吸器内科学
7. 北川 正信	富山医科薬科大学、名誉教授	人体病理学
8. 神山 宣彦	労働省産業医学総合研究所、部長	環境計測学
9. 三浦 博太郎	横須賀共済病院、部長	呼吸器内科学
10. 三宅 光富	兵庫医科大学、医員	呼吸器内科学
11. 森永 謙二	大阪府立成以病センター、主幹	環境疫学
12. 村井 嘉寛	富山医科薬科大学医学部、助手	環境病理学
13. 大山 正幸	大阪府立公衆衛生研究所、主任研究員	公衆衛生学
14. 坂谷 光則	国立療養所近畿中央病院、副院長	呼吸器内科学
15. 横山 邦彦	国立療養所近畿中央病院、元副院長	呼吸器内科学

滞在期間 自 1999年7月15日 至 1999年7月20日

学術会議報告書

学会名称 第1回中日共同石綿シンポジウム

学会テーマ 日中両国における石綿の健康障害

主催者日本側代表

富山医科薬科大学・名誉教授 北川正信

主催者中国側代表

中国予防医学科学院労働衛生職業病研究所・副所長 李 徳鴻

内容報告

北川正信 (富山医科薬科大学・名誉教授、
日本石綿研究会代表幹事)

第6回日本石綿研究会年次研究発表会を中国と共同で行おう、という発案から開催されることとなった第1回中日共同石綿シンポジウムは1999年7月16・17日北京市の天橋賓館「福寿の間」で行われた。

会は冒頭両国代表による挨拶、中国予防医学科学院許副院長による歓迎の言葉があつて記念撮影を行い、2日間にわたる学術交流に入った。今回のテーマは「両国における石綿の健康障害」であつたが、一般演題は中国から15題、米国在住の中国人が中国の資料に基づいて行った研究2題、韓国1題、そして日本から14題の計32題であり、主題別では疫学が中国(+米国)7、日本3、労働環境が中国2、臨床が日本5、病理が日本1、生物学的基礎研究が中国7、韓国1、日本4、方法論に関する基礎研究が中国1、日本1であつた。石綿関連疾患別にみると、全般的な扱いが6、石綿肺3、胸膜肥厚斑1、中皮腫6であり、個別疾患としては中皮腫が多かつた。これらに加えて特別講演が2題(スエーデンのHillerdal教授による「発展途上国ならびに産業先進国における石綿関連疾患の診断とその罹患頻度の将来展望」およびスロバキアのHurbankova部長による「繊維状産業粉塵の形状——その病原性における重要性」)、さらに特別報告1題(イタリアのBianchi部長による「イタリア北東部における石綿関連中皮腫と肺癌」)があつた。一般演題のうち中国からの3題が演者欠席のため取り下げられたが、上記のように各分野からの発表があり、熱心に討議が行われ、所期の目的を達成することができた。基本的には英語で行われたが、必要に応じて元日本へ留学していた中国人による通訳が行われ、大きな困難は生じなかつた。

総合討論で注目されたのは次の二点であった。一つは「クリソタイルのみによる肺癌等発生の危険性」についてであり、他は「なぜ日本や中国でかくも中皮腫が少ないのか」であった。前者については、中国側からのクリソタイル使用労働環境からの肺癌等発生の追跡調査が2題発表されたこともあり、中国産のクリソタイルにはトレモライトなどの混入がないのかどうか、日本はなぜクリソタイルの使用を続けているのか、が問題とされた。日本はILOの示唆に準じて「注意深く使用すれば安全」の立場をとっていることが日本側出席者から述べられた。また、中国産のクリソタイルについては産地別にその性状を日本の研究所へ送り調べるのが会議後ほぼ合意された。後者については桁違いに少ない日本（や中国）の悪性中皮腫の頻度が問題にされ、診断の確度によっているのではなく、（人口100万人に1人というのは）事実であり、近い将来増加が著しくなるであろうことが述べられた。

中国側からクリソタイルのみ使用している職場環境からの報告があったことに関連して、日本も企業側が率直にその使用石綿の種類や期間を示して信頼に耐える研究成績を挙げるのに協力してもらいたいという感想を持ったし、中国ではもっと生検・剖検という病理学的検索が日常化する必要があると思われた。また、中国における石綿取扱い上の注意点として挙げられていた innovation、water、seal、ventilation、protection、management、education、inspection の8項目が「なるほど」と思わせた。

本シンポジウムは当初計画された規模を上まわり、欧米からの演者の参加が得られたこと、会場をホテルに設営できたことは、中国保健省の全面的な支持が得られたこと、日中医学協会からの学術会議開催助成がえられたことによっており、関係当局に深く感謝したい。また、欧米からの視点でこのシンポジウムに参加し、かつ積極的に発言頂いた招へい講師の先生方には今後の研究の方向をも示して頂いたということでお礼を申し上げたい。第2回については確約はなされなかったが、3年後位に杭州市でいかがか、ということが石綿研究会出席者幹事会で話し合われた。

なお、研究会の前日中国予防医学科学院労働衛生職業病研究所を訪問し、紹介ビデオによる6研究部門の活動や後継者育成の状況の説明を受けた。建物とともにわが国の国立公衆衛生院に類似しているとの印象を受けた。